
夜間飛行

宍井智晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜間飛行

【Nコード】

N8819K

【作者名】

穴井智晶

【あらすじ】

恋人が百人いる飛行士シシイと、少年ミテキの、恋愛空模様。

天然でモテる人を好きになって、苦勞するけど、離れられない気持ちの行方。

滑走路灯（1）（前書き）

BLとして読んでもらっても、主人公は実は女の子と読んでもらっても、どちらでも通じるように書いてます。

滑走路灯（1）

地上に春雷が轟き、濁流がアスファルトを覆う夜。それでも雲の上の空には、いつも澄みきった晴天が広がり、深海のように静かに星と月がたたえられているはずだ。

空港内ホテルの窓からは、濡れた飛行機が滑走路にいらんでいるのが見える。地平線までぼつぼつとつらなる滑走路灯。その光と光のあいだを埋める闇の中を、地面を揺るがせながら大きな黒い鳥が飛びたつていく。

そのたびに窓は、轟音に震えていた。大きな鳥の羽ばたきが、世界を壊してしまいたいそうだった。

夜が深まるにつれて、十数台の携帯電話の音と光は大人しくなっていた。ゆっくりと部屋ごと、電波のとどかない水底に沈んでいくようだ。俺は、壁にかけられたシシイの制服に顔をうずめてみる。

これからずっと、シシイが帰還しなかったら、どうしよう。

まだ、言いたいことを何も伝えられていない。口にしたら、疲れさせそうだと、悲しませそうだと思っていた。そのせいで、自分の立場も危うくなる気がしていた。

でも、こんどこそ俺は、絶対に伝える。たとえ、百人いるシシイの恋人たちが、同じ言葉を繰り返しているのだとしても、同じことを一番大きな声で、何度でも言ってみよう。

“ずっと一緒にいて。俺だけを見て”

春の嵐のせいで、今日の午前の便は全てキャンセルになった。

三週間ぶりのオフを手に入れたシシイは、明け方にパイロットの制服を脱いで出ていった。

軽い春のコートを着て、すっきりとした後ろ姿が、ひらりと出ていくのを眠い目のはしでとらえた気がする。

それを黙って見送った俺は、誰よりもシシイの近くにいるのに、誰よりも遠い。もう、しばらく雲の上にも下にも顔をだしていない。ずっと雲の中を手さぐりでゆく日々が続いている気がする。

寝起きのぼんやりした頭のまま、俺は、ソファに脱ぎ捨てられたシシイの制服を壁にかけた。腕に三本、帽子に二本の線が、襟に三個のバッジがついている。遮光カーテンのすきまから差し込むかほそい朝の光が、きらきらとそれらを照らした。ご立派な機長だこと。

でも、長いつきあいになる俺は知ってる。シシイの頭の中は、百人以上に数が膨れあがった恋人たちのことでもいいだということ。そして、難関の飛行士に就いたのは、けして夢みたわけではなくて、追いかけてくる恋人たちから時間的にも地理的にも距離をとるために、しかたなかったからだということ。まったく、不真面目な男だ。

その恋人たちの情報とシシイのスケジュールを管理する秘書みたいな役を務めているのが俺だ。このまえ十三歳になった。

もう大人だし、誰よりもシシイの近くにいたいと思うのに、シシイはまだキスもしてくれない。

空港に棄てられていた九歳の孤児だった俺を拾った時と全く変わらず、今でも俺を子どもあつかいするシシイには、言いたいことがたくさんある。

ブラックジャックを読むと泣けるのは、ピノコに感情移入しちゃうからだっつーの、あっちょんぶりけ。

日が昇るにつれて、鏡台におかれた十数台の携帯電話が目覚めていった。薄暗い部屋の中で、着陸前に眼下にあらわれる町のネオンみたいに光るそれらを眺めながら、俺は少しずつ仕事モードに入る。

まずは、羽毛を集めたハタキを取り出し、慣れた手つきで、夜のあいだに携帯電話についた塵を払っていく。

まるで、山頂から羊たちを見守る羊飼いたいみたいに、まじめな顔をして。

けれど、鏡に映るもう一人の自分は、肩にふれる黒髪をゆらして、大きすぎる黒い瞳で俺をのぞきこみ、言った。

「ミテキ、家来を見下ろす王女様みたいに、傲慢になればいいのに」俺は、頭をふって、すぐにその声を追い出す。

それぞれの携帯には、十人ずつ連絡先が登録されていて、メールはすべて俺が確認して返信し、必要なものだけシシイの携帯に転送している。

電話がかかってきた時には、基本的に留守電対応だけど、メールやりとりの文脈から必要だと判断した場合は、シシイに転送。このへんの読みはプロ級になってきた。

シシイは、サイマルの送信メアド選択サービスを利用して、俺を通さずに返信することもできるけど、ほとんどしない。恋人を増やす一方で、直接の関わりは反比例して減っているのだ。

本末転倒、という言葉が頭を駆け巡って、俺はシシイを問いただしたことがある。限界だろう、せめて数を絞れよ、と。

「でも、最後には誰も残らない可能性もあるだろう。だから、もっと増やさないと」

これが、シシイの答えだ。そんなことしたって、と俺が言いかけると、シシイは、長くて柔らかいまつげのせいでいつも少し悲しげにみえる顔で、うつむいて言った。

「孤独になるだけなのはわかってる。僕の葬式には誰もこないだろうな。というか、きてほしくない。嘘がばれて失望させるくらいなら、空から灰を撒いてほしい」

必ずその最後の一人になって、シシイをみとる、風化風葬してあげる。だからもう、…俺はそう言おうとして、

「you can fly! you can fly! you
can fly!」

今みたいに、着信メロディーに邪魔されたのだった。斜光カーテンを開けながら、はい、シシイからの電話に出た。

『ミテキ？あのね、これから柏木に会うけど、僕って俺だっけ？』

シシイは、相手の好みに合わせて一人称を変えている。が、恋人の数が五十人を突破した頃から、その使い分けを覚えきれていない。

「僕”で大丈夫。あとで柏木ミハルの基本データ送るね」
それから、と少し迷ったけれど、俺は続けた。

「今日は、電話をつないだままにしてて。何か面倒なことが起る気がするんだ」

わかった、といってシシイはいったん電話を切った。

シシイは俺との通信に使う電話にだけ名前をつけている。「MD 87」、自分が初めて乗った飛行機と同じ名だそうだ。サンダーバードみたいなのに、ブリッジを使わずに飛行機の腹から乗り込むタイプでかつこよかったそうなの。

俺は、よく知らないけれど、シシイの命を預かるホットラインだと思ってもらえているようで少し嬉しい。

というわけで、常に軽く痴呆気味シシイのサポートシステム本格起動。柏木とシシイは、カフェに入ったようだ。おしゃれで静かな音楽とともに、店員の声が電話の向こうから聴こえてくる。俺は、聞き洩らすことがないように、イヤフォンを耳に押し込んだ。

『コーヒーとミルクティーお持ちしました』

『ミルクティーは、マユミに。』

『わーお砂糖かわいい』

いきなり、名前間違えているけど、気づかれていないのは、人徳？

『僕とデートするの、おとといぶりだよね』

『うん、おととしぶりだね。』

かみ合わないのに大丈夫なのは、恋の力？

『今日はずっとずっと一緒にいられるよね？』

『天候次第だな、この雨なら大丈夫だと俺は思っけど』

がるあがるあがるあがるあー

うわっ、背後で響く音に驚いて振り返った。この着信音は、あの女に決まっている、どうしよう。鏡台の前で不吉な赤い光を放つ携帯電話をとりあげた。

赤と黒のガラス鏡にびっしりみっちり埋め尽くされたデコ電は、握るだけで手が痛くなってくる。メールを開封すると、画面いつぱいに詰まっている文字、文字、文字が現れた。赤い太字で何度も「わたしだけをみて」と書いてある。

悪い予感の中しそうだ。俺は、ざっくり読んだあと、冒頭に要訳をそえて、原文のままシシイに転送した。

>トシシイ fromミテキ 今、あの小夜子からメールきました。すぐに会えないなら死ぬって。いつものことだけだ。 <

滑走路灯（1）（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。次で（滑走路灯編）完結です。

滑走路灯(2)

>toシシイ fromミテキ 今、あの小夜子からメールきました。すぐに会えないなら死ぬって。いつものことだけだ。 <

送信後すぐに、『you can fly』、シシイがメールを確認し、

『ごめん、ちょっとお手洗いでくる』

トイレから連絡がきたので、『you can』、はいミテキです、と出ると、シシイはもう泣きそうな声をしていた。

『小夜子、本気だと思う。』

ちよつと、おちつきなよ、と言う間もなく、シシイは言う。

『おとこの夜に会った時に、泣きながら言っていたから。一緒に死ぬ人探しているって。だから、僕はすぐ行かないと。ナミエ置いていくけど、あとはよろしく。』

「ナミエじゃなくて、マユミじゃなくて、ミハルだろ。本当におとこのなの？おとしじゃなくて？どうせいつもの狂言だよ、落ち着きな。」

『間違いない、おとこのだ、小夜子に刺された腕がまだ化膿してるんだ。あとで写メしようか』

「そうじゃなくて！刺された？大丈夫なのかよ？」

そんなことがあったと知らなかったから、俺まで不安になってきた。

『よろしく』

まで、あ、切れた、切りやがった。なんでいつも俺の話の聞こえとしないんだよ。“一緒に死ぬ人を探している”だって？まさかシシイ、死ぬ気じゃないだろうな。そんなわけ…あるかも。俺がへた

って座りこもつたとき、

「You can fly You can fly Yo
u」

まさかのシシイからのコールバック。俺は電話に飛びつき叫んだ。
「はい！行くんじゃねえ！死ぬ気かよ！」

『しー、ミテキ、おねがい、きいて。トイレの手を洗うところに
さ、悟史がいて、出ていけないの』

「悟史？三浦悟史？おかしいな、デートの予定バッティングした
？」

『動けないよ、なんとかして』
「わかった」

と言いながら、俺の右手はもう、青いスポーツカーみたいにつや
つやした携帯をつかみ、カコカコカコカコメールを打って、三浦を
外へ誘導していた。反射的に仕事をしてしまう俺。るんるんるん、
相手に俺のメールが届く音がする。

『あ、出て行った』
「シシイ、あのさ、」

悪い予感がするから、深入りしないでほしい。行かないでほしい。
そんな女の脅迫に乗らないでほしい。死ぬなんて考えてないってほ
つきりいつてほしい。俺のことをもつと、と口にする前に、つまら
ない白い携帯がちらつと光りだし、俺がそれに向かって八タキをぶ
ん投げていると、シシイが言った。

『ミテキ、ありがとういつも。何もかもミテキのおかげだよな。』

積乱雲の中から、ふいに浮上、深呼吸。静かすぎる紫色の空に星が散っているのがみえる。どうしよう、油断した。でも、俺はもう一度深呼吸してその空気を味わう。そして言った。

「絶対帰ってこいよな」

『じゃあ』

それっきり。

なんの連絡もなく、

零時をまわり、現在に至る。

携帯電話の電源も切られている。思えば、『じゃあ』ってなんなんだ、じゃあって。ちゃんと返事しろよ。愚直だからこそ得られる信頼もある、なんて思わずに、あんなメール削除すればよかった。もう会えなくなってしまうのかもしれない。そうしたら何もかも終わりだ。さつき一瞬、雲の上に顔をだした俺は今また、雲の海に窒息しそうになっている。

ホテルの窓から見える飛行場には、とつくに夜のとばりが降りていた。飛行機は、濡れた鳥がぬくもりを守ろうとするように、滑走路に並んでじっとしている。地平線までぼつぼつとならぶ滑走路灯あれが消えるとき、飛行機は飛ぶことも着陸することもできなくなる。俺たちは、まだ、飛べるのだろうか。

このままシイが帰還しなかったら、俺はどうなるんだろう。シイの幽霊みたいにメッセージを送り続けて、でも、きつと、着信

メールの数は減っていった、そして、忘れられる。怖くなって、俺は、今日何十回目かの電話をかける。

その時、かすかに、

巨鳥の羽ばたきの音にまぎって遠くで、

扉の向こうの廊下の奥から、

You can fly! You can fly! You
can fly!

聞こえてきた音に向かって俺は駆けていき、扉をあけて、

「ミテキ、いれて？」

声の主に抱きついた。

シシイは、ずぶぬれで、目がしらに血の塊をつけて、おぼつかない足どりで部屋に入ってきた。俺は、誰に対してかわからない怒りと悲しみがこみ上げてきたけど、床に倒れこみ目を閉じるシシイの体を拭き、頭の下に枕をおいて、毛布をかける。それでも、シシイの震えがとまらないので、何かないかと探して、毛布の上から制服をかけた。そうする俺の手まで震えていた。

シシイの手が、床をたたいて、そばに座れという。俺が横に座ると、シシイは頭を膝にのせてきた。俺は、シシイの髪を撫でる。

「ミテキ、俺って今日、何してた？よく憶えていないんだ。教えて」

「シシイが俺の手を握った。」

だから俺は、少しだけ落ち着きを取り戻して、シシイに話して聞かせる。

柏木ミハルと一昨年ぶりに会って、カフェでお茶をして、でも、臨時便の飛行機に乗ることになり、急に立ち去らざるを得なくて、泣きだしたミハルに謝って、パリのラデュレでお土産を買ってくるねと約束したよ。それから、半年ぶりに会う三浦悟史とカフェで会う予定を、急に変えて、ホテルに呼び出して。でも結局フライトの予定が入って会えなくなったから、今度こそ抱くね、って謝って。なのに、今、なぜかシシイは空にはいなくて、こんなボロボロになつて、ここに帰ってきたんだよ。

「そうか、僕ってどうしようもないね」

そういつて手を強く握ってくるシシイに、俺はまた、

「ミテキ、ずっと俺のそばにいて。俺のことだけみてて」

地上からは、けしてみることができない永遠の晴れ間を見せられてしまう。それは、俺が言いたかったことだ、油断した、あっちよんぶりけ。

きっと、息つぎのあいだだけだとわかっている。でも、この一瞬のために生きてもいいと思うくらいの星空が広がり、眼下の雲が地球を覆い始めている。そこに灯りがあるうとなかろうと、離陸しはじめた飛行機をとめることは誰にもできない。

朝が来たら、また長い間、シシイは空に帰る。

滑走路灯(2) (後書き)

第一部はこれで完結です。

第二部は、気長にお待ちください。夏以降になるかと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8819k/>

夜間飛行

2010年10月9日05時39分発行